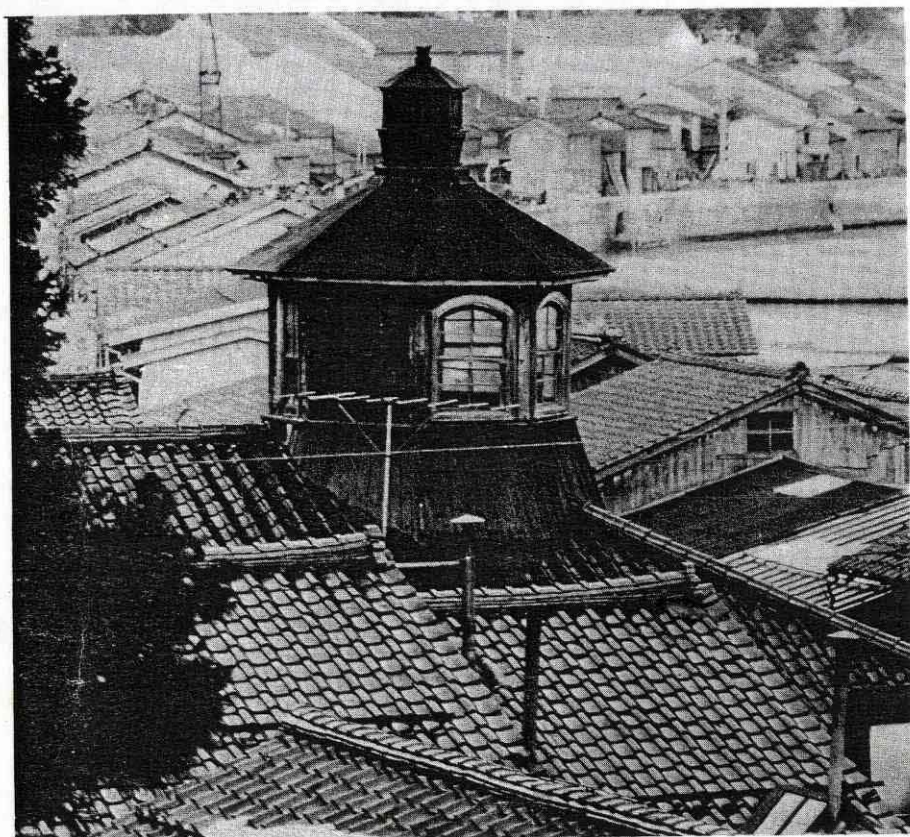


# 赤泊村の文化財



赤泊村教育委員会  
赤泊村文化財保護審議会





位置図



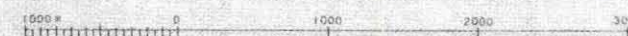
赤泊村全図



赤泊村の文化財(指定)一覧表

区分	番号	種別	名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者
県	①	工芸	鍍金装笠附錫杖及び数珠	1	昭27.12.10	佐和田町(佐渡博物館)	勝蔵院(佐渡博物館)
県	②	民芸	五所神社の御田植神事		昭51.12.25	大字下川茂	五所神社
村	1	建	春日神社の能舞台	1	昭51. 3.17	大字三川	春日神社
"	2	絵	六地藏図(板絵)	1	昭51. 3.17	徳和	東光寺
"	3	工	東光寺の鰐口	1	昭51. 3.17	"	"
"	4	"	林光坊の鰐口	1	昭51. 3.17	佐和田町(佐渡博物館)	林光坊(佐渡博物館)
"	5	書	方便法身尊号(蓮如上人筆)	1	昭51. 3.17	大字庭場	本龍寺
"	6	"	方便法身尊号(伝親鸞筆)	1	昭51. 3.17	"	"
"	7	古	慶長検地帳	1	昭51. 3.17	柳沢	柳沢部落
"	8	"	元和屋敷検地帳	1	昭51. 3.27	三川	腰細部落
"	9	"	"	1	昭51. 3.17	杉野浦	斎藤多嘉治
"	10	天	大掠神社の大櫃	1	昭51. 3.27	徳和	大掠神社
"	11	"	五所神社の大杉	1	昭51. 3.27	下川茂	五所神社

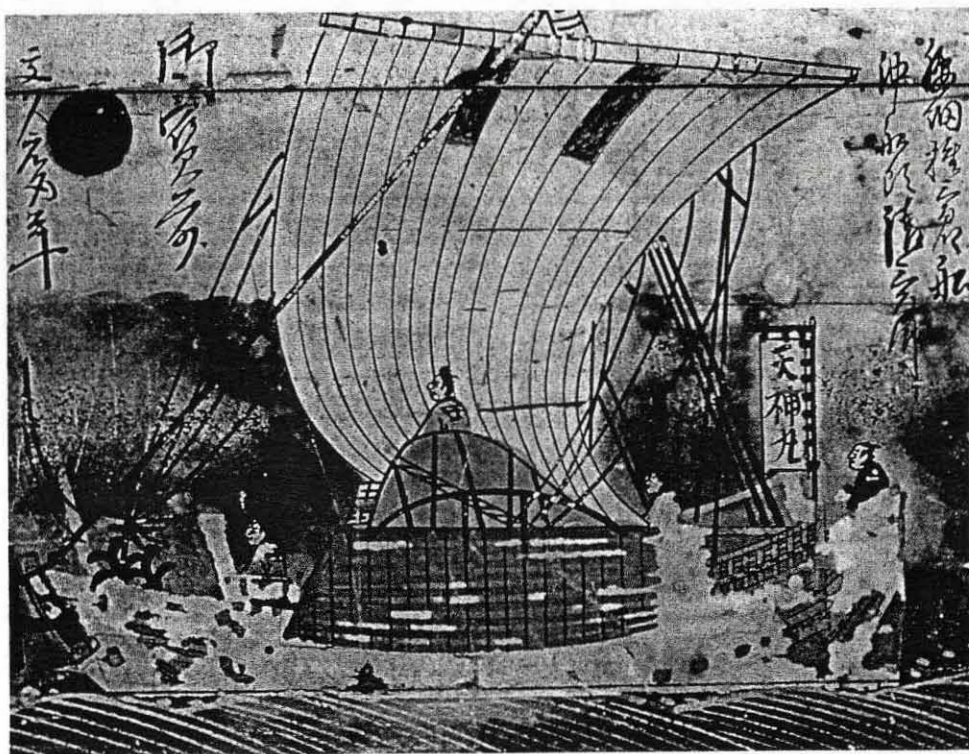
1:50,000











舟絵馬（遍照坊所蔵）



# 赤泊村の文化財



# 目 次

発刊にあたって	1
鍍金装笈	2
五所神社の御田植神事	3
春日神社の能舞台	4
鰐口(東光寺, 林光坊)	5
方便法身尊号(蓮如筆)	6
方便法身尊号(伝親鸞筆)	7
六地藏図(板絵)	8
慶長検地帳	10
元和屋敷検地帳	11
大棕神社の大櫃	12
五所神社の大杉	13
吾の望楼	14
木造薬師如来像	15
大黒天像(木喰行道作)	16
船 簞 笥	17
薄墨の曼陀羅(伝日蓮筆)	18
日蓮聖人発船地	19
佐藤枝彦の書	20
廻船 久徳丸の幟	21
船 絵 馬	22
山田の古民謡(はんや, やつとこせい, そうめんさん)	23
鬼 太 鼓	24
小獅子舞	25
腰細城址	26
赤泊城址	27
一 里 塚	28
但馬江跡	29
山田磐台山の水石	30
そ の 他	31
あとがき	33
文化財保護審議会委員名簿	34

# 発刊にあたって

待望の「赤泊村の文化財」が刊行されることになりました。文化財保護審議委員の方々の不断のご努力の賜であり、心から感謝の意を表します。

開発により文化財が滅失、き損、亡失されることを嘆き、惜しまれ、その保存が強くさげられるようになったのは、戦後も数年経過してからのような気がします。国においては、昭和25年法律第214号をもって文化財保護法を制定し、赤泊においても昭和45年に赤泊村文化財保護条例を制定、審議会委員8名をもって組織、以来真剣に文化財の発見、発掘、調査、研究に努力を重ね、精力的に取り組んだ結果、このような調査報告と村指定の答申を頂きました。

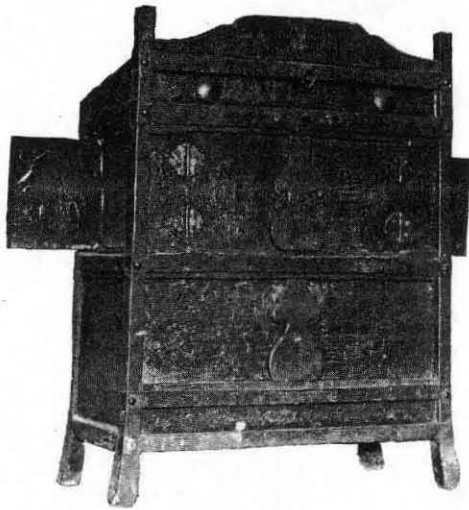
最近、郷土を見直そう、村の歴史を知ろう、と言う気運が高まり、歴史講座の受講、現地研修の参加等、多数の方々が熱心に研修され、其の成果が期待されている現在、この小冊子がさらにその糧となり、教材となることを期待いたします。

此の外にも現在の我々の手で保存し、保護して後世に伝えなければならない数多くの有形・無形の文化財、衣食住、年中行事等の民俗文化財、古墳、城跡、名勝地等、歴史上、学術上、観賞上、価値の高いものがあると思われますので、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

昭和55年3月

赤泊村教育委員会

教育長 金子 實



## 《県指定文化財》

# 鍍金装おい笈

種別	工芸品（有形文化財）
名称	鍍金装笈附錫杖及び数珠
指定年月日	昭和27年12月10日
所在地	佐和田町佐渡博物館
所有者(委託管理者)	赤泊村大字杉野浦 勝蔵院 (佐渡博物館)

笈（おい）は元来中国で文  
った板製のものをいう。本品  
塔、楓葉、菊花、流水等の文  
の棚で、側面と共に観音開き  
を伝えるのは貴重である。

なお、勝蔵院（勝浦氏）は

意であったが、日本では山伏修験僧などが仏像や仏具を納めて背負  
倉時代の作と推定され、鍍金金具をつけたもので、正面に力士、宝  
打出している。形は縦長扁平で、四柱が脚となり、前部は上下二段  
をなす。内部に納める本尊五仏と付属の数珠、錫杖と併わせた一具

代まで本山方の修験であった。



## 《県指定文化財》

五所神社

# 御田植神事

種別	芸能（無形文化財）
名称	五所神社の御田植神事
指定年月日 <small>（国による民俗芸能の選択）</small>	昭和51年12月25日
所在地	赤泊村大字下川茂 五所神社
所有者・管理者	御田植神事保存会 代表 古宮義幸

御田植神事は一年の豊作を祈願し、田植の所作を神前へ奉納するもので何時の頃より斉行されたかはわからないが、現存する最古の棟札に「延宝二甲寅年宮方七人」と銘記されているので、その時より執行されていた事がうかがわれる。この神事は氏子の内宮方株を持つ家の長男のみが世襲で伝え、他の家人には絶体に教えられず、また神事式当日は午後より境内へ女人の立入りが禁止される。以前は正月6日に行なわれていたが、現在は2月6日午後3時より斉行され、神事は苗取式、朝飯式、田打式、昼飯式、大足式、田植式、夕飯式の七つの儀式に分かれて執行され、大足式は古宮家の世襲で、また宮方筆頭と称して宮方株の長を受け継いでいる。田打式、田植式、奉仕の六人の席次も定められていて古東（ことう）家を頭に吉田家、中山家、松之畑（まつのばたけ）家、半田家、源助家の順となり、源助家が太鼓の相図役となっている。





## 《村指定文化財》

春日神社

能 舞 台

種 別	建造物（有形文化財）
名 称	春日神社の能舞台
指 定 年 月 日	昭和51年3月17日
所 在 地	赤泊村大字三川（腰細）
所有者・管理者	春日神社（宮司 渡辺 泰）

〔建築様式〕 木造、かや葺き、橋がかり組立式

〔寸 法〕 正面 7.3m（4間） 奥行 5.45m（3間）

『佐渡の能といえば、世阿弥と思われるが、実際は、大久保長安をはじめとする江戸時代の歴代佐渡奉行が庇護を与えたため、村々でも盛んになったと考えられている。以前はどんな小さな村でも能舞台があり、村人が能を楽しんだものであるが、今では数少なくなってしまった。』

春日神社の能舞台は、山田及び腰細の有志が協議し明治初期に建造された。その構造も優れていて、南佐渡でもまれにみる舞台である。主要木材は佐渡では本村特産の榎の木である点も珍しい。この敷地は山田の菊池作太郎氏が全盛期に寄附したものであり、木材、資金等も愛好家有志により、寄附建造されたものである。

なお、新穂村潟上の本間能太夫家にある文久元年の文書によると本村の神事定能場としては、徳和大倉、赤泊若宮、河茂五社、外山大平の四ヶ所となっている。



《村指定文化財》

## 東光寺の鰐口

種別	工芸品(有形文化財)
名称	東光寺の鰐口
指定年月日	昭和51年3月17日
所在地	赤泊村大字徳和
所有者 管理者	東光寺(住職 伊藤良雄)

〔銘〕 「女谷墨彼女 文明十季戊戌  
十二月廿日 殿内彦五郎第」  
※文明10年(1478)

〔径〕 23センチ

〔由来〕 境内社熊野神社にあったという。寺伝によれば殿内彦五郎は当時の住職雲庵耕月の弟(紀州の国牟婁の人)で、背負ってきたという地藏尊像は今も当寺の位牌堂に安置されている。



《村指定文化財》

## 林光坊の鰐口

種別	工芸品(有形文化財)
名称	林光坊の鰐口
指定年月日	昭和51年3月17日
所在地	佐和田町 佐渡博物館
所有者 (委託管理者)	赤泊村大字三川 林光坊 (佐渡博物館)

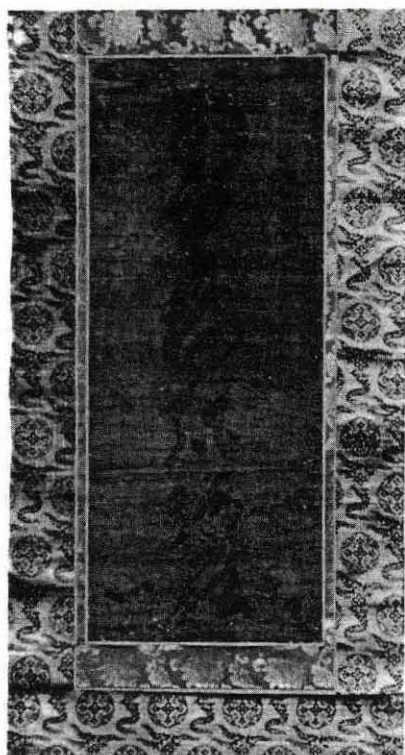
〔銘〕 「奉寄進信州善光寺井福大明神鰐口文  
安二年九月九日 願主 源大浦兌」  
※井福大明神は善光寺の鎮守  
※文安2年(1445)

〔径〕 17センチ

〔由来〕 鎮守熊野神社にあったものであろう。熊野山伏安達氏が信州からもってきたと伝わる。

勝蔵院の笈とともに佐渡における熊野修験の活動を知る上で貴重なものである。なお、林光坊の鰐口は銘のある鰐口としては佐渡最古のものである。





# 《村指定文化財》

## 蓮如上人筆 方便法身尊号

種	別	書 跡（有形文化財）
名	称	蓮如上人筆 方便法身尊号
指 定 年 月 日	昭和51年 3月17日	
所 在 地	赤泊村大字蓮場	
所有者・管理者	本龍寺（住職 松本秀麿）	

〔名 号〕 南 無 阿 弥 陀 佛

〔寸 法〕 縦 79センチ、 巾 31センチ

〔由 来〕 この六字名号は、大谷の蓮如上人が、寛正5年（1464）5月7日、善性にあて、尾張国羽栗郡河野道場の本尊として、下付したものである。この善性は翌寛正6年、門徒と共に佐渡国に渡って来たという。

### 裏書

大谷本願寺 釈 蓮如 花押  
 寛正五年甲申五月七日  
 方便法身尊号  
 尾張国羽栗郡河野  
 道場本尊也  
 願主 釈 善性



# 《村指定文化財》

伝親鸞筆

## 方便法身尊号

種 別	書 跡 (有形文化財)
名 称	伝親鸞筆 方便法身尊号
指 定 年 月 日	昭和51年 3月17日
所 在 地	赤泊村大字菰場
所有者・管理者	本龍寺 (住職 松本秀麿)

〔名 号〕 歸命盡十方無礙光如來

〔寸 法〕 縦 48センチ、 巾 23センチ

〔由 来〕 親鸞上人の直筆といわれるもので、寛正6年(1465)に善性が門徒と共に当地へ渡ってきた時に持参したと伝えられる。

本龍寺は、向太子という場所にあり、近くに聖徳太子堂があつたのであろう。菰場の太子は佐渡三太子の一つといわれており、地区には聖徳太子を奉ずる特殊な職業集団がこの地にあったと思われる浄土真宗では、親鸞上人が太子の夢の御告げで阿弥陀信仰に入ったといわれ、太子信仰が盛んで、本龍寺も当地の太子信仰集団を頼って渡来したのであろう。渡来の理由は、寛正元正発足を伝える。西三川砂金の開発に関かわっていたとも推定されている。本文化財はこうした当時の社会情勢や、蓮如上人の本願寺門徒集団の活動を考える上で重要な意味を持っている。







《村指定文化財》

# 六地藏図 (板絵)

種 別	絵 画 (有形文化財)
名 称	六地藏図 (板絵) 狩野伴幽斎描
指 定 年 月 日	昭和51年 3 月17日
所 在 地	赤泊村大字徳和
所有者・管理者	東光寺 (住職 伊藤良雄)

〔作 者〕 狩野伴幽斎

〔内 容〕 板に1体ずつの地藏が墨で描かれているもので、金剛宝、放光玉、金剛願、金剛撞、金剛悲、預天賀が描かれている。

〔形 状〕 縦 87センチ、 巾 32センチ

伴幽は久隅彦十郎といい、狩野派中興の祖とされる探幽の弟子であったが罪をうけ、佐渡に流され、一旦赦されて江戸へ帰ったが、再び佐渡に渡り、享保15年(1730)相川で没した。その画風は狩野派の伝統を忠実に伝えるものとされる。

板書六地藏の裏面には「享保三戊戌年正月如意日 現住英洲代」とあるから、伴幽晩年の筆であることがわかる。

英洲(宅穩英洲大和尚)は12世住職で享保18年に没している。





## 《村指定文化財》

### 柳沢村 慶長検地帳

種	別	古文書（有形文化財）
名	称	慶長検地帳（柳沢村）
指	定 年 月 日	昭和51年 3 月17日
所	在 地	赤泊村大字柳沢
所	有 者 ・ 管 理 者	柳沢部落（惣代書類箱蔵）

慶長2年（1597）から慶長5年（1600）にかけて、河村彦左衛門によって、島内一斉に実施された検地である。

従来より見積られていた苅高（本）に新たに発見した増加見積り（見出し）を付記し、肩に地名を下に所有者名を載せた形式で帳面が作られている。慶長検地帳とか河村検地帳とか呼ばれるこの検地は、各村の中使の立会いで行なわれていることから中使検地などともいわれる。中世的な見積りだけによった検地と、近世的な竿を使つての測量による元禄検地との中間的な検地ということが出来る。島内でも、この慶長検地帳はわずかしが残っていないが、慶長前後の村のようすを知るには貴重な史料であり、赤泊村にはこの柳沢のものしか見当らない。

「佐州東三河之内柳沢村御料所」となっているから、上杉氏直領であったことがわかる。

水田 五十七筆、百姓九名、寺一か寺

本 十六石二斗九升二合九勺

見出し 七石九斗二升

合 二十四石二斗一升六合九勺 （中使不明）



《村指定文化財》

杉野浦村

元和屋敷検地帳

種別	古文書(有形文化財)
名称	元和屋敷検地帳 (杉野浦村)
指定年月日	昭和51年3月27日
所在地	赤泊村大字杉野浦
所有者 管理者	斉藤多嘉治氏

《村指定文化財》

腰細村

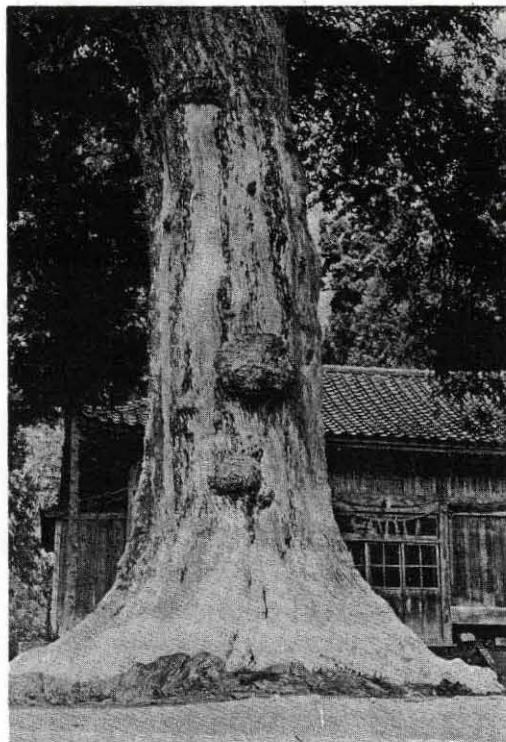
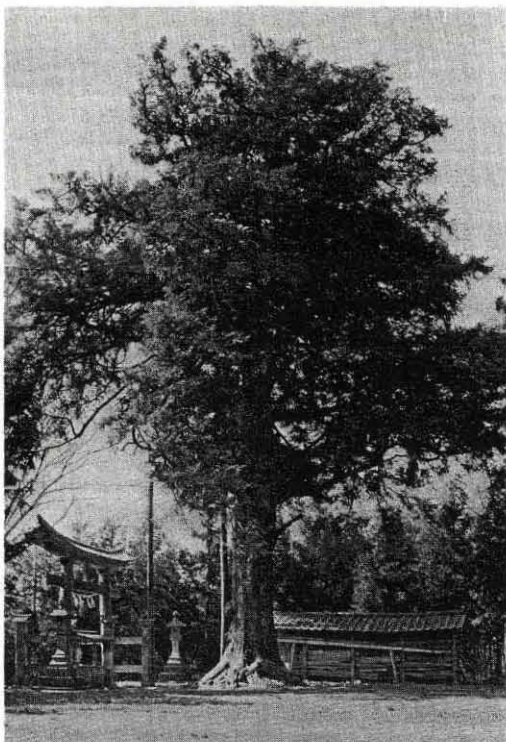
元和屋敷検地帳

種別	古文書(有形文化財)
名称	元和屋敷検地帳 (腰細村)
指定年月日	昭和51年3月17日
所在地	赤泊村大字三川
所有者 管理者	腰細部落(惣代書類箱蔵)

元和3年(1617)、時の佐渡奉行田辺十郎左衛門は佐渡一国の屋敷検地を実施し、屋敷地子を定めた。  
慶長5年(1600)河村彦左衛門の水田検地と、この元和検地により水田及び屋敷の税が確定したのである。

本村では杉野浦村と腰細村のものが見つかっており、後の写しではあるが徳和村のものもあり、最近、真浦村元和屋敷検地帳(所有 真浦 石塚栄一氏)も発見されている。





# 《村指定文化財》

大椋神社(神木)

大

榎

種	別	天然記念物(記念物)
名	称	大椋神社の大榎
指 定 年 月 日	昭和51年 3 月17日	
所 在 地	赤泊村大字徳和	
所有者・管理者	大椋神社(宮司 渡辺 泰)	

〔樹 種〕	榎		
〔大 き さ〕	根 廻 り	4.9メートル	
	目どおり	4.5メートル	
	樹 高	約 30メートル	
〔樹 齢〕	600年以上		

赤泊村を象徴する木として、「榎」が指定されている。

榎の木は一位科に属し、その材質は堅牢、地緻、耐水性が強く、建築材をはじめ、最近ではピアノの用材としても重用されている。

特にむかしから基盤材としては有名で、最も適し、珍重されている。

年々、樹数は少なくなっているが、本村では大字徳和地内に一部の群生地を見ることが出来る。



## 《村指定文化財》

五所神社(神木)

大 杉

種 別	天然記念物(記念物)
名 称	五所神社の大杉
指 定 年 月 日	昭和51年3月27日
所 在 地	赤泊村大字下川茂
所有者・管理者	五所神社(宮司 風間英雄)

〔樹 種〕 杉(すぎ科の常緑高木)

〔大 き さ〕 根 廻 り

目どおり 5.21メートル

樹 高 約 30メートル

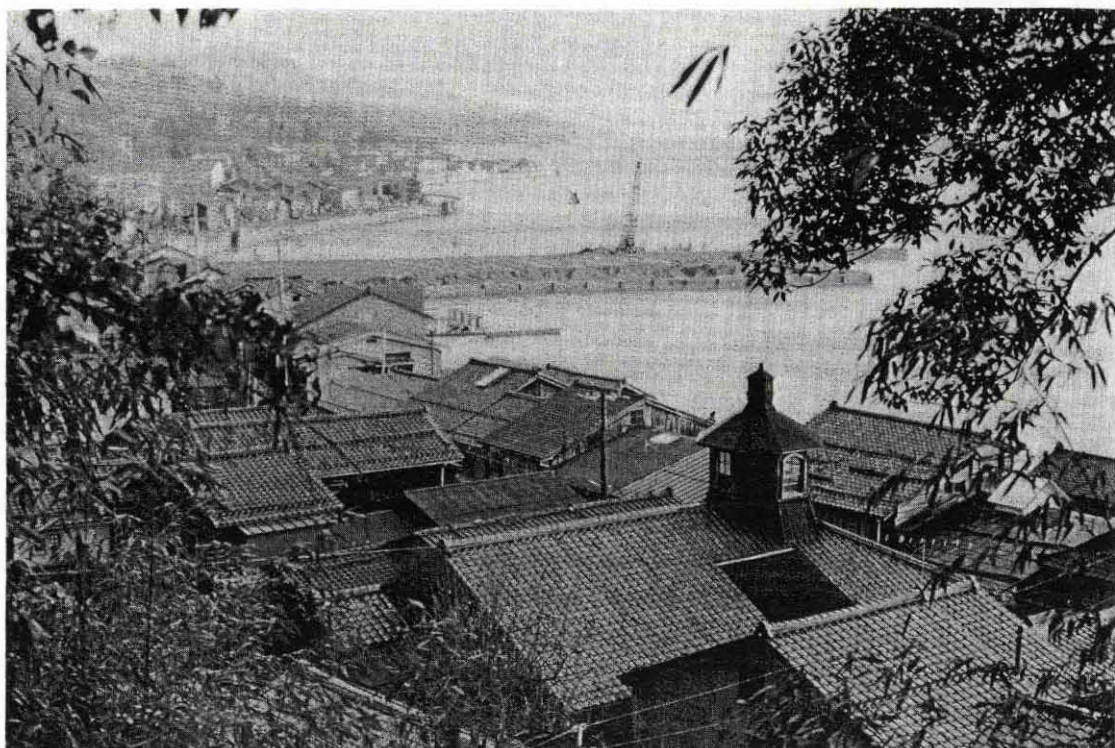
〔樹 齢〕 約 800年

川茂杉は自生の杉とも言われ、その特徴は切り株から芽が伸びて育っていく萌芽性と雪に強いという事で、その質の良さは有名である。これは川茂の気候・土質が、杉の生育に適しているからと思われる。

下川茂の杉は、幕府御林としても、佐渡では羽黒の杉と並び称され、弥彦神社の鳥居にもなった。

一番大きな木は太郎杉と呼ばれ、切株に20人乗って酒盛りが出来たと言い伝えられている。





## 《建造物》 <sup>かねきち</sup> 吉 の 望 楼

〔所在地〕 赤泊村大字赤泊175番地

〔所有者・管理者〕 故 田 辺 俊 氏

〔建築年代〕 明治30年

〔大工棟梁〕 故 田 部 房 吉（中町長四郎）

〔形状・様式〕 望楼は八角の建物で畳敷にして約4.5畳、天張までの高さ約2 m 70位、1 角の間が1 m 25、7 面はガラス窓が取り付けられ、下の部分が上げ下げ式になっており、その7 方のガラス窓からは、赤泊の街は勿論、北東は松ヶ崎から庭場、腰細、小熊の集落が展望され、佐渡海峡のむこうに弥彦、角田、米山が一望出来る場所に在る。

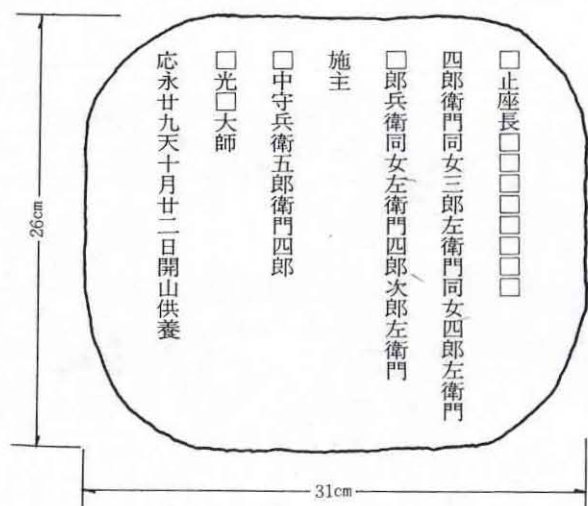
〔田 辺 九 郎 平〕 田辺九郎平は天保2年（1831）赤泊村の小農田辺九郎兵衛家に生まれ19歳の時、大望をいだいて北海道に渡り、江差で苦勞をして呉服商や鮭場漁師への貨付などをして巨万の富を築いた。50余歳で帰郷した九郎平は、港湾改修こそ郷土発展の長計を信じ江戸時代以来の赤泊港の改良に私財を投じた。現在の赤泊港の基礎は九郎平の力によって造られたのである。

この建物は、九郎平の自宅として建てられたもので、望楼のある洋風の外観は、北海道の鯨御殿を思いおこさせる。



## 《彫刻》 木造薬師如来像

- 〔名 称〕 東林寺本尊 木造薬師如来像  
 〔所 在 地〕 赤泊村大字下川茂 東林寺  
 〔所有者・管理者〕 東林寺（下川茂 古東勝三郎氏）  
 〔 銘 〕 台座裏面に墨書銘がある。



〔寸  
〔伝

法〕 像高 46cm  
 来〕

東林寺の壇那惣代であるという古東家は川茂殿の家老と伝えられており、この本尊はその先祖が九州から持って来たものと云われている。

おそらく地方の仏師の作と思われるおおらかな表情は、すばらしい出来ばえである。

応永の銘を持つ仏像は、佐渡でも珍しく、赤泊の中世を解明するためにも、大いに役立つものと期待される。





## 《彫 刻》 大黒天像 (木喰行道作)

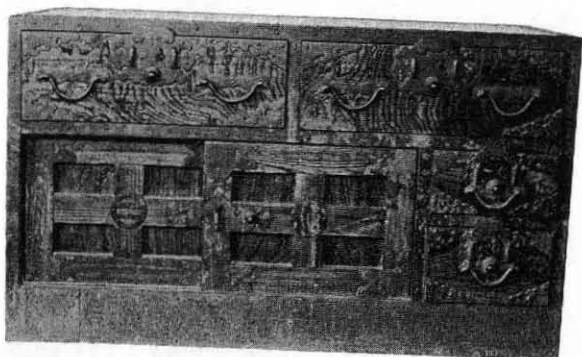
〔所在地〕 赤泊村大字三川  
 〔所有者・管理者〕 猪股サク氏

〔形状〕 丈 9センチ 巾 3センチ

〔作者〕 木喰行道の作。像の下に木喰の銘が彫り込まれている。行道は天明元年(1781)に佐渡へ渡り4年間在島したが、その間平沢(両津)の九品堂(くぼんどう)を建てたり、檀特山釈迦堂などの再建をしたりした。

二千体の仏像製作を依頼したというが、佐渡では九品堂の九品仏(焼失)をはじめ多くの仏像を彫った。現在見つかったいる仏像は地藏8体、大黒8体、薬師2体、ダルマ1体、天神1体、弘法1体、釈迦1体などである。

川端家の大黒天もその1つで、最小の仏像である。



〔形状寸法〕

幅 88.5cm  
奥行 45.5cm  
高さ 51.5cm

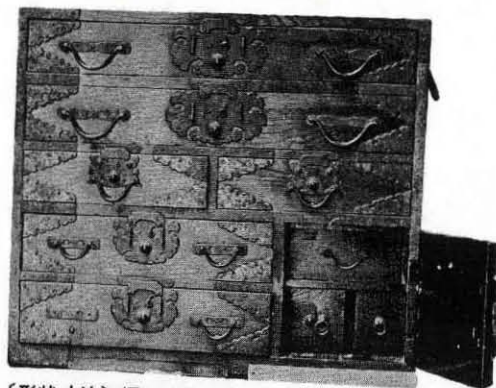


〔形状寸法〕

幅43.0cm、奥行51.0cm、高さ48.5cm

〔所在地〕

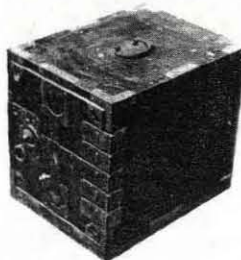
佐和田町佐渡博物館  
〔所有者(委託管理者)〕  
赤泊村大字赤泊  
松沢美佐子氏  
(佐渡博物館)



〔形状寸法〕 幅76.5cm、奥行46.0cm、高さ65.5cm

〔所在地〕 赤泊村大字赤泊

〔所有者・管理者〕 中川 泰氏  
(上町葛野伝右エ門氏より買受け)



〔形状寸法〕

幅 33.0cm  
奥行42.0cm  
高さ37.5cm

〔所在地〕

赤泊村大字三川  
〔所有者・管理者〕  
猪股忠雄氏

## 《工芸品》 船 簞 笥

船簞笥は船に必要な重要書類、貴重品、金銭の保管に使用したもので、中は桐材を用い、引き出しの棚にすかし底を設けて売買仕切などの書類をかくした。

外側は部厚いケヤキ材を用い底を二重に張ってある。正面は精巧に図案した頑丈な金具でおおい、四隅に金具を打ちつけてある。

二重の錠前の金具をつけた船簞笥は北前船(日本海廻船)の特徴をもった見事な工芸品で、福井県三国、佐渡小木、山形県酒田の三港で特にすぐれたものが作られたが今は作られなくなっている。

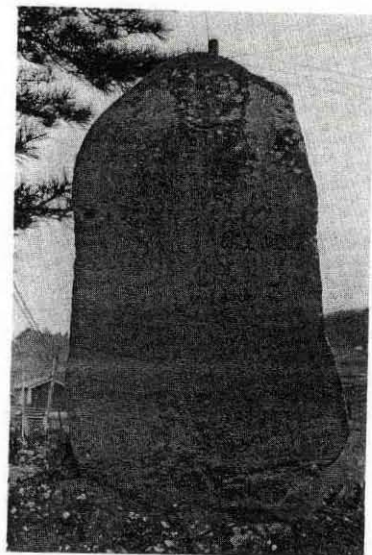
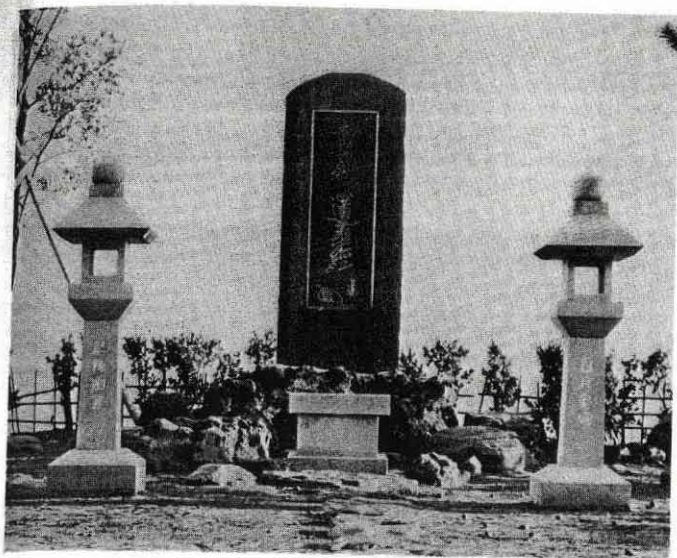


## 《書 跡》 薄墨の曼陀羅 (伝日蓮筆)

〔所在地〕 赤泊村大字真浦  
 〔所有者・管理者〕 永 井 高 吉 氏  
 〔寸 法〕 縦 90センチ 横 44センチ

当地の伝承によれば、文永8年(1271)佐渡に流配された日蓮は、同11年の春、赦免を得て鎌倉に帰られることとなり、曾利地越を通過して、3月13日夜遅く、月影を踏んで、真浦にご到着なされたが、宿る家も尋ね当らず、日蓮堂(現在)下の洞窟に夜風を防いで、一夜を明かされた。郷士永井三郎左衛門は、洞窟から日蓮をわが家に迎え、明けの15日乗船を仕立て、越後柏崎にお送り申し上げ、その砌、聖人より屋号「船元」を賜わった。後年同人が身延参詣の際拝受したという十界本尊は、墨色薄い出来ばえから、「薄墨曼陀羅」とよばれ、同家に宝蔵されている。





波題目碑

## 《史 跡》 日蓮聖人発船地

〔所在地〕 赤泊村大字真浦地内

〔由来〕 光日坊御書に「文永十一年二月十四日御赦免状、同三月八日に佐渡の國につきぬ。同十三日國を立ち、まうら（真浦）といふつ（津）にをりて、十四日はかのつ（彼の津）にとどまり、同十五日に、越後の寺とまり（寺泊）のつ（津）につくべきが大風にはなたれ、さいわひ（幸い）にふつかぢ（二日路）をすぎで、かしはさき（柏崎）につき……云々」と日蓮直筆の文面のように、真浦の津から乗船された。

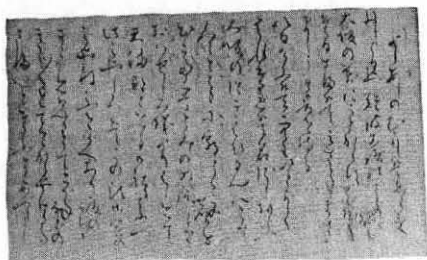
その発船の場所と伝えられる「日蓮瀬」は、明治三十年の大水害後陸地化し、今は「波題目」の碑が、大体の場所を示しているに過ぎない。

波題目の碑文は

「日蓮上人此國に流され四年を送り給ひ文永十一年の春、赦免を得てこの浦より船に移り鎌倉に帰らせ給ひしとぞ夫よりして、月あらたになる夜に信心こらして海上をみれば、波のあや題目の文字をなすとかや是を傳へて波題目といふ

文政六末年九月建立」

と記され同碑文は勝海船の一族の勝桓兵衛正朝の筆になるものであり、真浦には、このように古くから日蓮に関する様々な伝承が伝えられ、現在も全国から数多くの信者を集めている。



——枝彦の日記——

〔所在地〕 赤泊村大字赤泊  
〔所有者・管理者〕 遍 照坊（住職 北村議孝）



——枝彦の書——

〔所在地〕 赤泊村大字徳和  
〔所有者・管理者〕 佐々木貫一氏

短冊



## 《書 跡》 佐藤枝彦の書

〔佐 藤 枝 彦〕

枝彦は赤泊の廻船商人で、町年寄も勤めた升屋勘十郎の雅号である。

本居大平について国学を修め、和歌をつくり、佐渡三大家の一人といわれた。また、絵画にもすぐれていたという。

嘉永6年（1853）2月没す。62歳。

〔枝 彦 の 日 記〕

佐藤枝彦の旅日記で、たて9cm、よこ16cmの小冊子である。

年号は書かれていないが3月29日菅の屋を出て、松坂に1泊、4月1日出発して奈良、大阪を経て船に乗り、金毘羅に詣で、船や陸路を交ぜながら大坂に着き、京都へ上る。更に大津、石山寺を廻って4月27日松坂に帰る。その後、山田をまわり4月晦日（30日）吉田の宿に泊る。6月1日に出発し東海道を下って、9日江戸の柳はし宿に到着している。その間に40首の和歌が詠まれている。

「我うし(大人)に、なには(浪花)にて卯月十一日に別し」とあるから、師・本居大平と途中まで同行したのであろう。

枝彦の日頃の行動、性格、書体、歌風さらに当時の佐渡の文人の意識を知る上には大切なものである。



《民俗文化財》 廻船 久徳丸のほりの幟

〔所在地〕 赤泊村大字三川

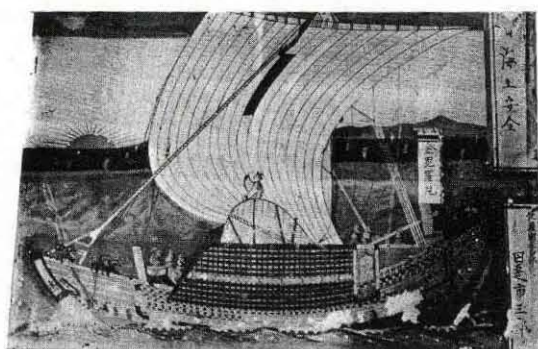
〔所有者・管理者〕 猪股忠雄氏

〔由来〕 木綿に墨で、久徳丸と染めぬいた縦2.85メートル、横92センチの幟である。旗が少し小さいように思われるので、あるいは対岸の越後相手の小型廻船の旗であったかもしれない。旗をつなぐ手の一部がとれて相当使い古した感じの旗である。

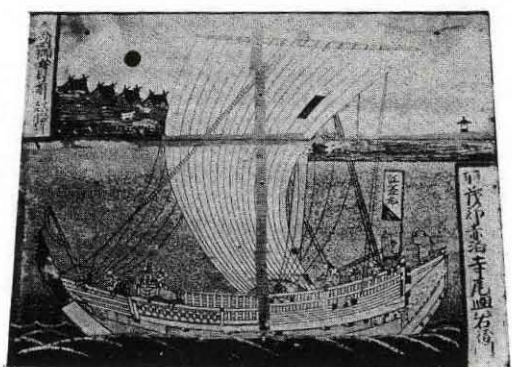
尚、久徳丸の備品である往来箱もあり、その表面に「羽茂郡腰細村久徳丸猪股弥一郎」裏面に「天保十一年三月吉日」と記されている。また、古い羅針盤の外枠の原形がある。

この船（久徳丸）は二十二枚型といって帆の数が二十二反あったという。春は米や干イカなどを積んで、大阪に向い大阪や瀬戸内から塩、綿、半紙、砂糖などを積んで来て、途中各地で商いをした。また、佐渡のアバナワ（漁業用のなわ）を積んで北海道に向う。北海道からはミガキ（身欠）、ホカワリ（外割）、ササメ（肥料用）などのニシンをもって佐渡へ帰ってくる。船の水夫（かこ）は村内の者が多く、船が入ってくると、テンマ船で迎えに出たという。この隣にある助十郎という家も北海道がよいの船名をとった弁才屋とよばれており、また横平家にも八幡丸という関西を主に商いをした船がいた。ちなみに楠の大樹が大阪から移入したものとして伝えられている。腰細川の河口は廻船の出入りが多い潤の口だった。

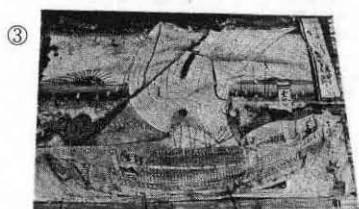




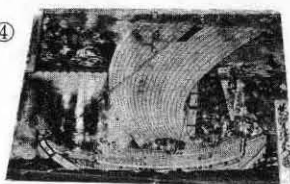
①



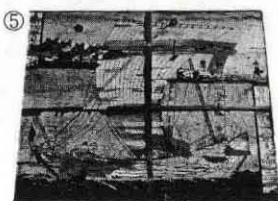
②



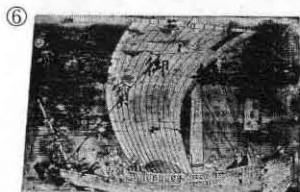
③



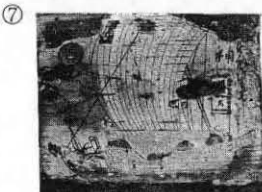
④



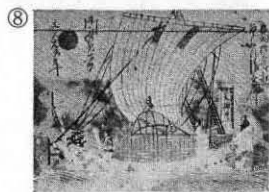
⑤



⑥



⑦



⑧

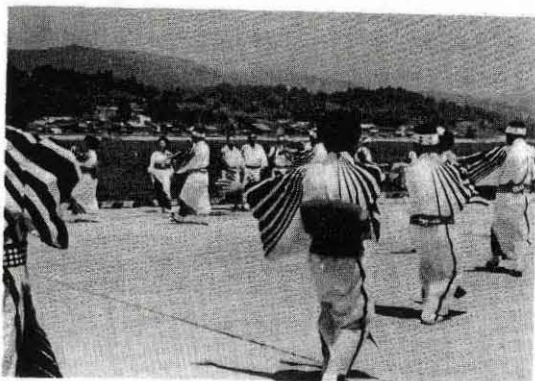
## 《民俗文化財》 船 絵 馬

### 〔所在地及び所有者・管理者〕

①	赤泊村大字赤泊	西 方 寺	明治10年	金毘羅丸	赤 泊	田辺市三郎
②	赤泊村大字赤泊	寺 尾 政 治	文政 4 年	江 差 丸	赤 泊	寺尾与右衛門
③	赤泊村大字赤泊	八幡若宮神社	明治11年	金毘羅丸		
④	赤泊村大字徳和	徳 和 神 社	文化 9 年	富 吉 丸		葛野与治右門
⑤	赤泊村大字徳和	北 袋 観 音 堂	年 欠	江 差 丸	赤 泊	寺尾与右衛門
⑥	赤泊村大字真浦	真 浦 神 社	年 欠	権 喜 丸		菊地奎左衛門
⑦	同 上		年 欠	船 名 欠	赤 泊	弥市か
⑧	赤泊村大字赤泊	遍 照 坊	文久元年	天 神 丸	腰 細	権三郎船 沖船頭 清三郎

船絵馬は廻船業者が商売繁盛と船の航海安全を祈願して、各地の寺社に奉納した船の絵の額である。

赤泊は江戸中期ころから栄えた港であったから、多くの船絵馬が神社に奉納されたと思われるが、現在赤泊村に残っているものは、わずか8点である。



## 《民俗文化財》

### 山田の古民謡

はんや  
そうめんさん  
やっこせい

〔所在地〕 赤泊村大字三川（字山田）

〔保存団体名〕 山田古民謡保存会

〔はんや〕

へーアア ア、 はんやはんやで半年ゃくらすヨ <sup>（合はやし）</sup> ハ よんさよんさよんさな あとの半年  
ヤーア ヤーレーヨねてくらすヨ <sup>（合はやし）</sup> ハ よんさよんさよんさな

〔女〕 わたしゃ十六ささげの年だ だれに初成りもがしよやら

〔男〕 おらが若いときゃ新潟まで通うた 三巾前掛帆にかけて

〔女〕 兄（あん）ちゃんだと兄ちゃんだと思つて 庭の山椒（さんしょう）の木にかきついた

<sup>（合はやし）</sup> ハ 大阪天満 高崎弁天 梨の木地藏さん 大きいのに小さいのにニョッカキニョッカキ  
<sup>（合はやし）</sup> ハ よんさよんさナ

〔女〕 太鼓持ちゃ太鼓持ちゃ可愛よ 鳴らぬ太鼓をなれなれと

〔男〕 おどりおどるなら所作（しな）よくおどれ しなのよいのを嫁にとる

〔女〕 きたりきなんだり夏せきの水 どうせこないならこでもよい

〔女〕 石が嚙まりよか油が呑めよか いやなお人とそわりようか

<sup>（合はやし）</sup> ハ 負うた子に抱いた子に ザカザカ這う子に 障子の組み子にといつて（取り付いて）  
立つ子も みんなお前（めい）さんの子じゃないか 可愛がつてやってくらんせ

ハ よんさよんさよんさナ

〔男〕 いやならおいてくらんせ汝（うな）がようなかばちゃ ひとつ種をまきゃ千も成る

ハ ういたのにすいたのほれたもはれたも道楽ア似たもん ハ よんさよんさよんさナ

〔そうめんさん〕

へーそうめんさんのそうめんさんの出所（でどこ） 西が曇れば雨となる ヤレ雨となる <sup>（踊り手が繰り返し斉唱するはやし）</sup>

西が曇れば雨となる ヤンサコイヤンサコイ

そうめんでもそうめんでも冷やせ かかよこんだの婿ア餅やよめぬ

餅もいやなら団子もいやだ わたしゃ主さんのソバがよい

団子ころめくボタ餅やねまる ま餅や立派なもんだキリキリと

団子ばっかりよりモチあげておくれ 石の地藏さえいうてござる

〔やっこせい〕

へーアア ヤーレーエ 山で木をきる 音なつかしや ア <sup>（踊り手たちの斉唱はやし）</sup> コラドッコイ ドッコイショ

主が炭うたく ヨーオー 山だもの <sup>（踊り手たちの斉唱はやし）</sup> イヤ ヤットコセー ヨイヤナー

主が木をきりゃわしや枝そぎに 主が炭う出しゃホロかけに

山のそそから煙があがる アラセ煙やら鼻につく

山できる木はぎょうさんあれど 思いきる気はさらさない





## 《民俗文化財》

# 鬼 太 鼓

### 〔浅生の鬼太鼓の由来〕 赤泊村大字徳和（字浅生）

浅生の鬼太鼓の構成は鬼が3匹（内、赤鬼2匹、黒鬼1匹）それに太鼓うち、はやし方等その他打子4、5人、総勢14、5人である。浅生の鬼太鼓は3匹の鬼が薙刀（ナギナタ）をもっている。相川鉦山の坑夫が金を掘る姿態を舞踊化したものが、浅生の鬼太鼓であると伝えられている。鬼の持っているバチは、左手がタガネであり、右手は金鍬で、左手のタガネを右手の金鍬で頭上を1回転してはガンと打つ、その所作であるという。

なお、浅生の鬼太鼓は国中や相川系のものと違って薙刀（ナギナタ）を持っているところにある。

### 〔薙場の鬼太鼓の由来〕 赤泊村大字薙場

年代はいつのころか良くわからないが、玉蔵坊（現在、天満山玉蔵寺）に一人の旅の山伏が立寄り何年も薙場にいたものと言う。この山伏が薙場の当時の若衆に残した芸で、その始めは天満山の祭事にのみ行なわれていたもようである。その後白山大権現を祀りて産土神とし今から百四、五十年程前に、当時の若衆がこの鬼太鼓芸にいくらかの改良を加えて、この芸を産土神の祭礼の氏子回りの余興芸にしくみかえて今にいたりしものと伝えられる。

この山伏は当時薙場に露出石炭を発見して、石に火をつけて村人を驚かし、村人には漁業に引網のわざをもさづけて行きしものと言いつたえられている。

浅生の鬼太鼓と違って今では薙刀（ナギナタ）は持ってなく、踊り方にも次の三通りがある。

#### ①旧式（松ヶ崎流＝別名、ドンコスコ）

松ヶ崎から伝わる踊り方で、天保年間の末から明治の半ばにかけ改良を加え現在に至る。沢野のジイさんが趣向をこらした。この旧式と呼ばれるのは、必ず二匹の鬼で舞うのが特色で一人芸でないのもむづかしい。旧式には道僧（ロウソウと呼ぶ）はつかない、横でハヤスだけである。

#### ②中式（河内流＝別名、ドンドコドンコン）

河内からならって伝える舞い方。道僧が鬼と対で舞う。

向太子のお宮についていたもので、むかしはナギナタ使いという舞いもあったという。

#### ③新式（丸山流）

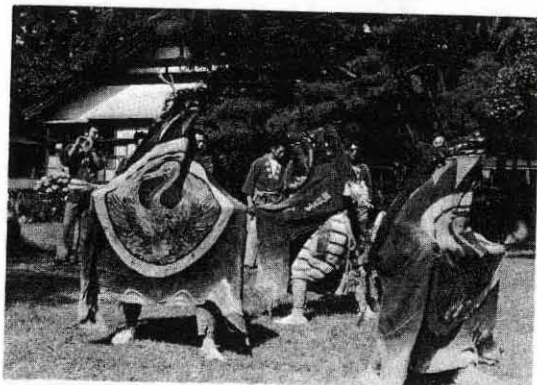
丸山から、明治の終りから大正にかけて習った舞い方である。新式は中式とたいした違いはないが腕の振り方が中式は三回で新式は四回である。

なお、この三種の舞い方は、若衆の内ですれぞれ役づきが決っており、他の芸は、絶対踊らない、自分の決めた舞いを最後（定年）まで舞う。

### 〔腰細の鬼太鼓の由来〕 赤泊村大字三川（字腰細）

浅生組（鬼太鼓）から腰細へ婿に行った人が部落の若ものに伝えたものらしく、舞の動作、道具は浅生のものと同じである。いつごろ伝えたものかは定かでない。





## 《民俗文化財》

# 小獅子舞

### 〔杉野浦小獅子舞〕

杉野浦のお祭（4月1日）には欠くことの出来ない舞になっている。その始まりは全く不詳であるが、ずいぶん古いころ村人三人が、紀州（今の和歌山県）熊野本社へおまいりした時、霊夢のお告げによって同所より迎えて帰って、伝えた技と伝えられている。

獅子の頭飾りや、所作（拍子、かまえ、足のふみこみ）等は、他（赤泊新谷、小木町、赤玉、河崎、相川町〈北の河内北田野浦〉）のものと多少の差異はみられるものの、歌詞は同じで、歌に合わせて牡獅子、牝獅子、子獅子の三匹を組み合わせるおどりで、足のふみこみは八陣式（天・地）に、そして七五三にふりかけている。

歌には走り歌と練り歌（宮の前、寺の前、百姓の前でそれぞれ異なっている）と休み歌とかんびやく衆があり、前庭と後庭にわかれていて、この間に太刀を入れる踊りが入るが歌はない。

### 〔赤泊新谷の小獅子舞〕

言い伝えによると、赤泊の大屋利左衛門（今の仁科家）が京都の祇園祭を見て帰り伝えたと言われている。現に祇園の八鹿舞に似ていると云う。この舞を伝えてきた年寄りによると 200年前ごろには盛んに舞われていたであろうといっている。

### 〔歌 詞〕

- 前庭 走り歌(踊)……廻り廻りの水車、遅く廻りて堰にとまるなとまるな
- 練り歌(踊)宮の前……此庭は東下りの西上り御庭よいとて心そらすな 心そらすな
- 百姓の前……百姓衆は常より今年が御目出度い稲場揃へて秋の出穂まつ 秋の出穂まつ
- 寺の前……ざくざくと黄金の砂を踏み分けて寺へ詣るも後の世の為め 後の世の為め
- 走り歌

（牝獅子を尋ねて）……七ツから今までつれたる牝獅子奴をこれのお庭にかくしとられた かくしとられた

（互に顔を見合せ）……牝獅子牡獅子の振り見さよ如何に心がよねんなるかも よねんなるかも

（牝牡三頭共に）……沖の遠中の浜千鳥波にゆられてパット立たれた パット立たれた

- 休み歌……脇差の出どこはどこぞと人間はば音に聞こえし関の孫六 関の孫六
- かんびやく衆(歌も踊りも)……

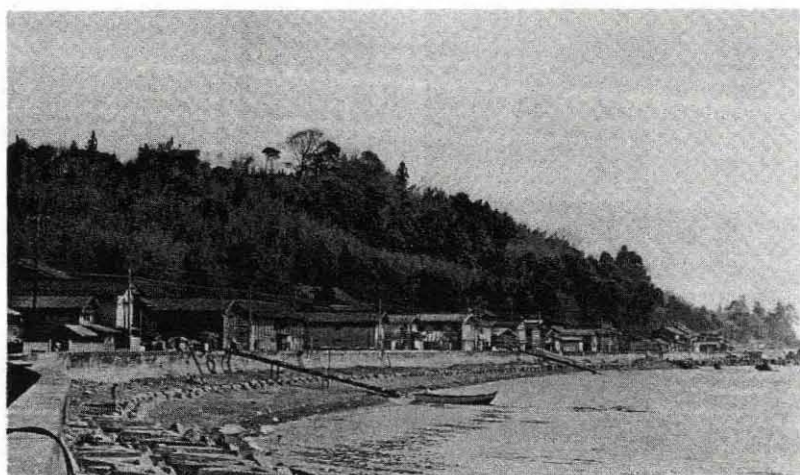
かんびやく衆をたちより聞けば面白や鼓の音が何時も絶えせず 何時も絶えせず

- 走り……花の都をみゆぞとするおぼろ月夜に急ぐ連れ哉 急ぐ連れ哉

（此の間に太刀を入れる踊あり、歌はなし）

- 後庭……此の松に鶴と亀とが巣をかけて鶴は千年亀は万年 亀は万年

注）前庭、練歌、宮の前、百姓の前……それぞれ2～5つの歌詞あるも省略。



## 《史 跡》 腰 細 城 址

### 〔城址の位置、形態〕

腰細城址は赤泊大字三川（明治10年の町村合併により、腰細村、山田村が合併したもの）551番地ほか24筆にある。

小佐渡山中より発する腰細川が、山麓の山田の部落を通り、腰細の海に注ぐあたりの下流域は赤泊地域でも最も広い谷平野を形成している。

この腰細川最下流右岸、海岸に向って突出した独立山角を利用した小規模ながらも形の整った山城である。腰細川下流左岸段丘には中世の瓦を伴う不動院跡や林光坊（共に真言宗）、熊野神社跡や春日神社などの宗教的機関が集中している。

山城址は山頂の主郭、副郭をはじめ、御方屋敷、中ノ城などの諸郭を置き、さらに谷平野および海岸に面して、東から南にかけての山腹部をとり巻く腰郭、山頂から山下にかけて切りさげた4本の空堀などによって防備的な土工を施してある。

山麓の海岸に接した平地帯（住宅地域）に「平城」の地名があるが、これは城主の居館の置かれた所であろう。

### 〔城

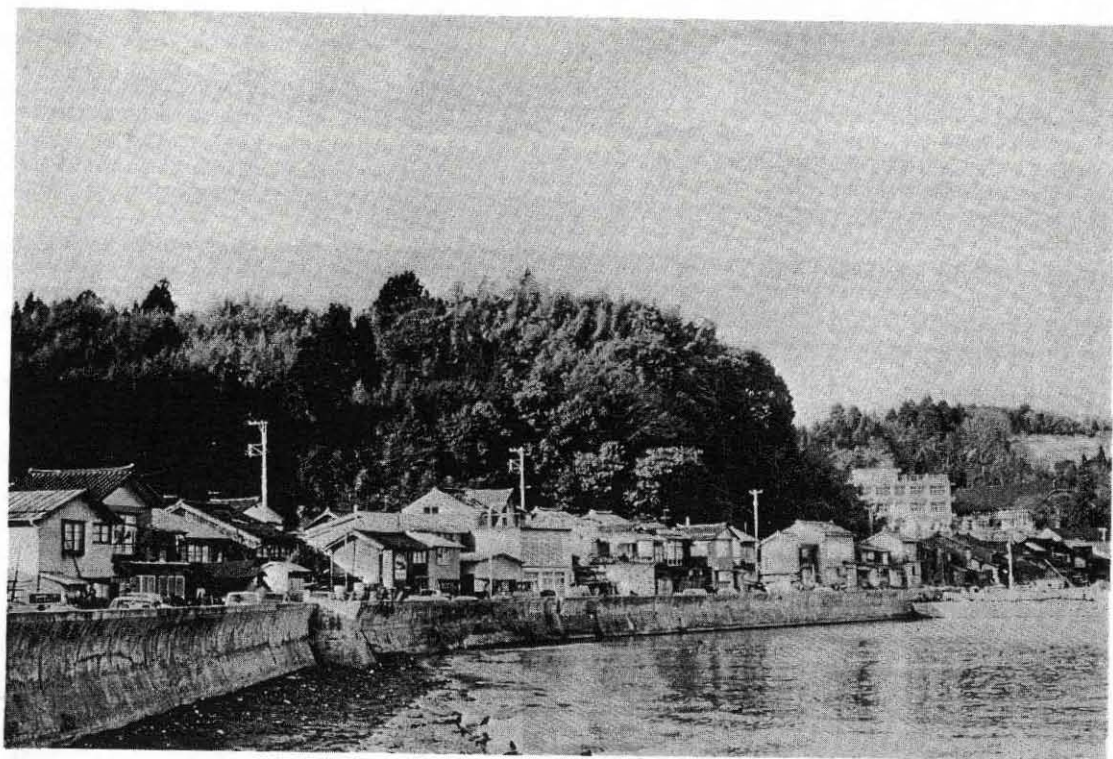
### 歴〕

城主は本間三川守という人だったと土地の人たちは伝えている。城主菩提寺である赤泊村大字徳和の曹洞宗東光寺の過去帳には開基「本間山城守源秀純」明徳2年（1391）7月20日没という記録がみられる。

また、同寺墓地には江戸時代正保4年に三川普代の百姓中が城主の遺徳をしのび百年忌に建てた1m半にも余る大五輪の供養塔があり、この台石に「本間但州守 相□慶岩元乗居士」の文字が見える。（なおこの殿様墓地には宝篋院塔2基と小五輪数基が並び、これは室町中期以降のものとみられる）だから、本間三川守という呼び方は、あるいはこの地域が中世の三川郷であったところからつけられたのかもしれない。

戦国期末、腰細城西方の赤泊港の上の山に築城した羽茂本間氏（本間対馬守高貞）の弟に本間参河守高頼という人がいるが、あるいはこれと混同したとも考えられる。





## 《史 跡》 赤 泊 城 址

〔所 在 地〕 赤泊村大字赤泊

〔由 来〕 城山は、荒町川西側の港に向かって突き出た舌状の丘陵を利用した戦国末期の城址である。

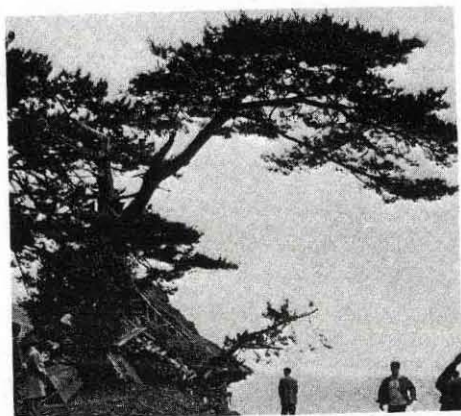
たしかないことはいえないが、天正のころ赤泊城主本間参河守高頼（羽茂地頭本間対馬守高貞の弟）の築いたごく一時期の城と思われる。丘陵先端部に本郭を置き、背面を崖下まで落ちる空堀りで切っている。

風雲迫る対越後との関係に備えて、赤泊港監視用に作られたものであろうか。

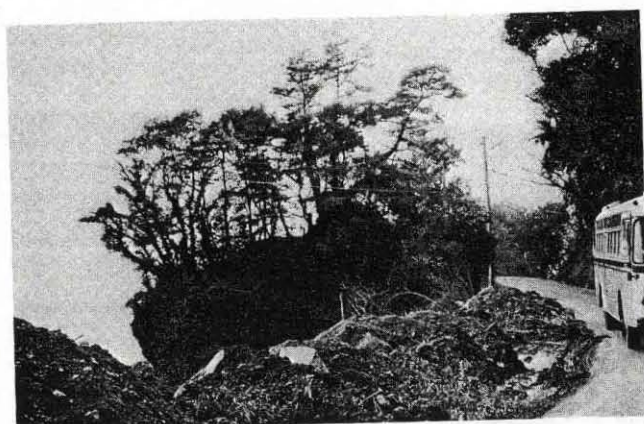
平城（殿様の日常の居館）は、現在の小学校付近にあったようである。

本間氏滅亡後は、佐渡奉行大久保長安の手代として、赤泊より水津までの村々を預った横地所左衛門が役所を置いた。





薙場の一里塚



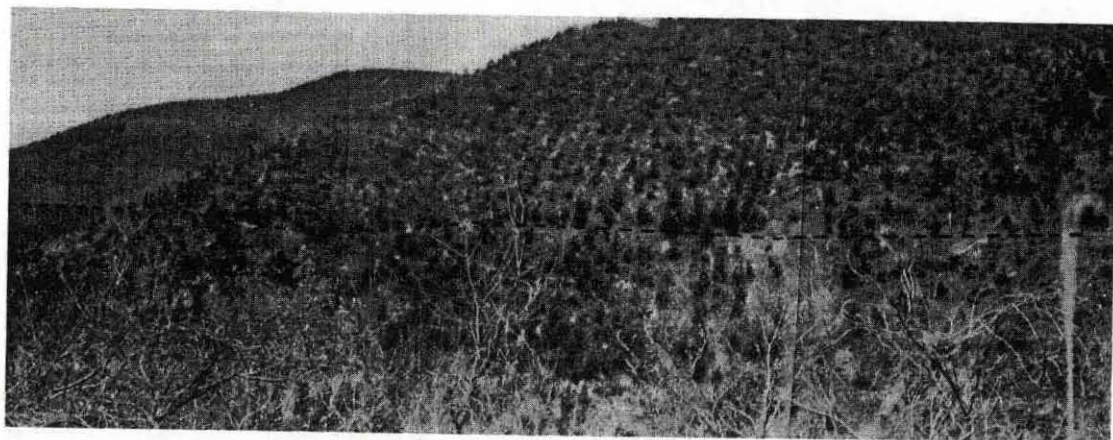
杉野浦の一里塚

## 《史 跡》 一 里 塚

〔所在地〕 赤泊村大字薙場(字大熊)、赤泊村大字杉野浦(字中山)  
 〔由来〕 承応2年 佐渡奉行伊丹播磨守、羽田町札ノ辻から、中山道、国仲道中筋へ一里塚を築く、明暦元年奉行伊丹藏人(播磨守の子)加茂、羽茂、雑太三郡境を改め定め、この年一里塚をも築く。「佐渡年代記」すなわち、承応2年(1654)頃より、明暦元年(1655)ころにかけて、伊丹奉行親子によって、佐渡の一里塚が築がれたとされるが、その後も交通路の発達や距離の修理に伴い築造されたようである。

赤泊村では、薙場字大熊と杉野浦字中山にその遺構が残っている。普通街道の両側に一基ずつ築かれるのであるが当村の一里塚は片側(海岸側)の一基だけが残っている。

一里塚で、今残っているものは少なく、貴重な遺構である。



## 《史 跡》 但 馬 江 跡

〔所 在 地〕 赤泊村大字外山、川茂地内

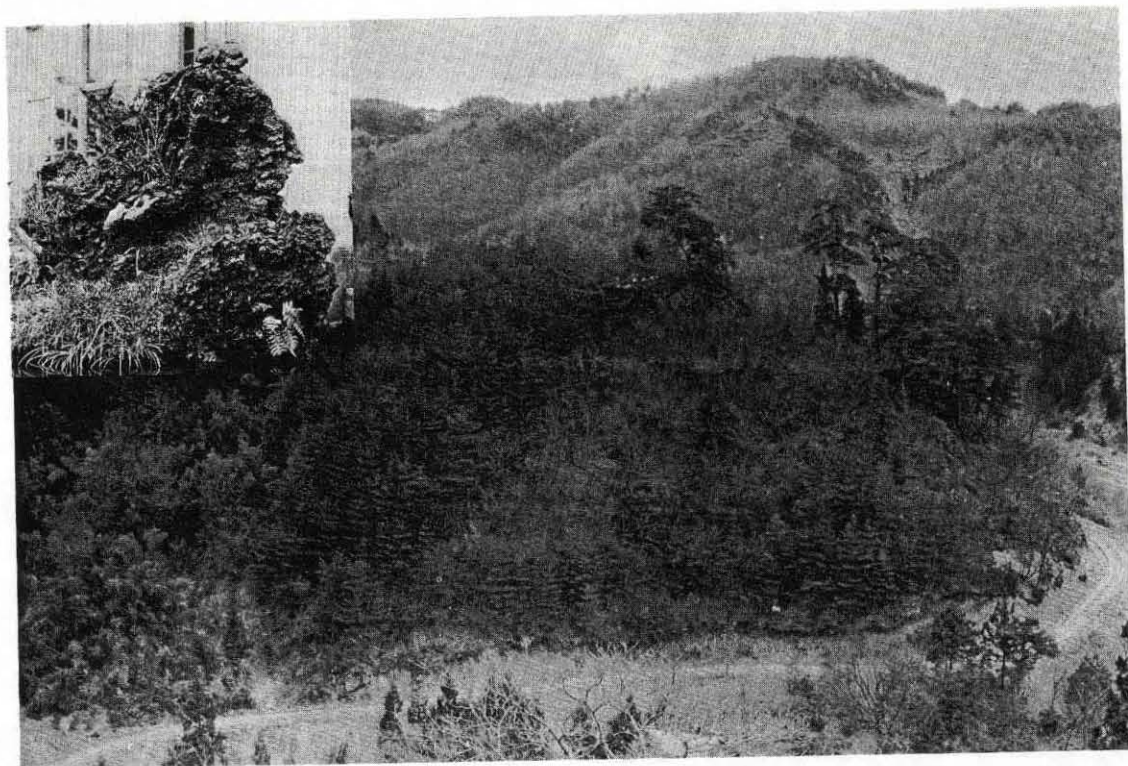
〔由 来〕 味方但馬守が小木岬地方を開田しようとして、その水源を羽茂川の上流、外山に求めて、着工したものと云われ、測量には人に提灯を持たせて並ばせ、対岸の山で測ったものと言われている。

起点は、外山の七平沢の奥、蛇の川内を山奥に進み、仙峡に近い二瀬川より始まり、外山部落の上の方を通り、上川茂の山中を通過、下川茂小泊新谷の天地（アマイケ）を通過、滝平地内に入り大峯の上にある、上ノ平の田頭より、黒山の高地屋の上を通過、滝平の新開田に出て、山の稜線を下り、村山地内まで続いている。

外山奥にある地獄沢の大岩盤にあたって、油千樽をそそいで、岩を焼いたがどうすることも出来ず、また村山に出て、低い所を越えて行く方法がなくて、遂に諦めたものと伝えられている。

現在でも使用されている所は、外山安兵衛の後を通り、大東の下を流れる水路と、関の川内より、中ネギの田に通る江があり、春の雪解けには、外山より滝平に至る間に、江形がはっきりと残り、当時の姿がうかがえる。江戸時代の初期にこのような、遠大な構想のもとに、この大工事が行われたということは現在でも驚歎に値するものであり、現今このようにはっきりと当時の姿が残っていることは、貴重なものである。





けい だい さん

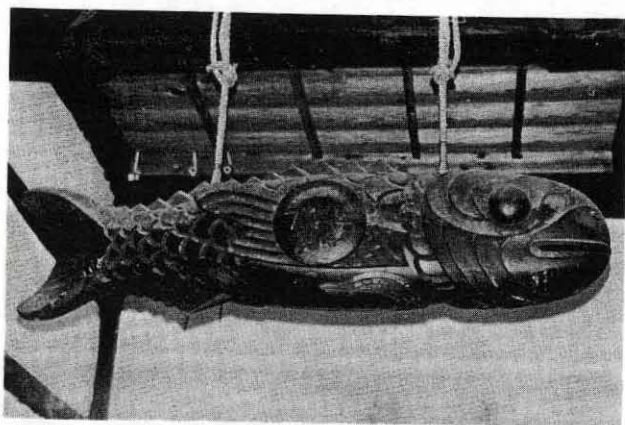
## 《天然記念物》 山田磬台山の水石

- 〔所在地〕 赤泊村大字三川(山田) 番地
- 〔由来〕 明治初年に本間六四郎(坂)という風流人が磬台山の一面(40坪~50坪)に奇岩怪石(石英岩)に木の自生した雅致を発見し、手ごろの形のものを盆石として賞がんし出し、水分を吸う能力に優れているので、草木を植えて水盤で鑑賞したことが始まりである。
- 昭和の初め頃にはかなり大量の採掘を試み、新田力蔵(甚左)がこれを一手に引受け各地に売りさばき、その真価を広く世人に認めさせた。
- 戦後、大字総代所が中心になり大量採掘し、村内はもとより島外へも売りさばき、大字の財源として役立てた。ちなみに赤泊村役場庁舎玄関口に据えてある水石は、昭和40年に山田部落が庁舎新築記念に寄贈したものであり、日本唯一の名石ともいえよう。現在では鉱脈も尽きたとみなされるに至り、個人所有本間健治氏土地に昔の採掘跡がみられる。磬台山水石は佐渡はおろか日本中、赤玉石と並び称されるところとなり、その希少価値はいよいよ認められている。





三川不動院のヒラギ  
(幹回り1.27m、高さ5.0m)



東光寺の魚鼓



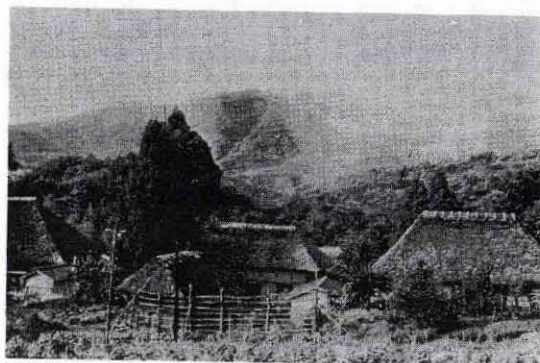
とうどや(村の年中行事)



舟小屋



赤泊町内の山車(彫刻)

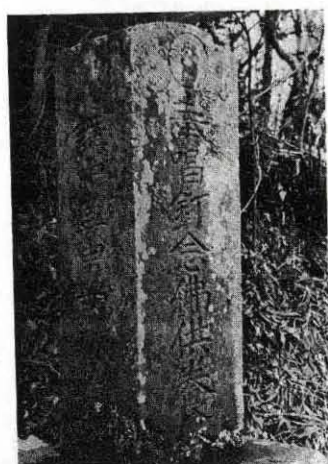


カヤ葺の民家





足尾山塔



釘念佛塔  
村の石塔



庚申塔



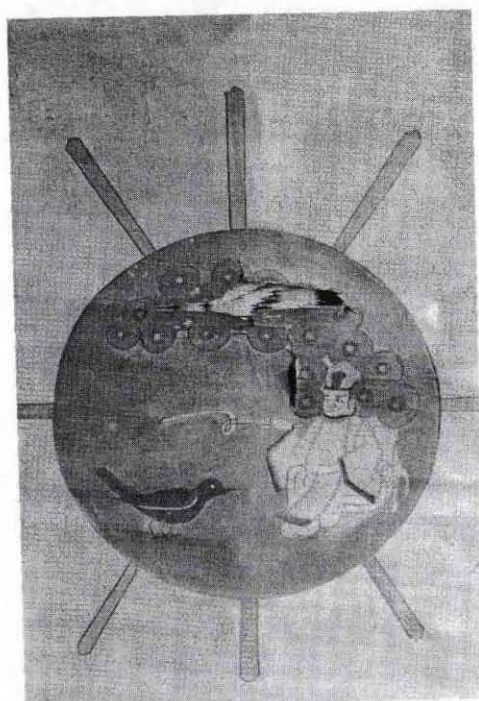
往來箱



外山のネマリバタ



元禄検地帳



徳和板立家の修験資料

## あ　と　が　き

文化財は、私達の遠い祖先が素朴で乏しい生活の中から、衣食住に創意と工夫、或は模倣で編み出し造られた、まことに貴重な遺産であります。

この本は、昔の人々のくらしに伴う物資や機器など、民具といわれる有形のものから、伝統をもって地域に根付いた宗教的行事や芸能に見られる無形の文化財で、本村の主なるものを抜粋し、写真と解説付きで編集した「村の生きた史実」とも言えるものでありましょう。

ここに掲載しきれなかった農林漁業に関わる生活、生産用具や職人用道具、美術品や書画なども網羅できたら充実したものになったと思いますが、色々な事情で残念ながら一応このようなものになりました。

ともあれ、本紙の発刊にあたり、快く資料の提供や写真撮影にご協力くださいました諸兄に深く感謝する次第です。

これを一つの踏み台として、やがて実現するであろう村の民族資料館（仮称）の建設へと期待のもてる一資料ともなるなら本当に幸いです。

昭和55年3月

赤泊村文化保護審議会

委員長　平　野　二　八



# 赤泊村文化財保護審議会委員名簿

## 第一次保護審議会委員 (S.46.4 ~ S.48.3)

委員長	佐々木 貫 一	委員	山 田 猛
副委員長	松 田 孝 之	"	古 宮 義 幸
委員	菊 地 六郎平	"	平 野 二 八
" (故)佐々木 佳 伝		"	金 子 敞 範

## 第二次保護審議会委員 (S.48.4 ~ S.50.3)

委員長	金 子 嘉伝次	委員	金 子 貞 夫
副委員長	安 達 実	"	伊 賀 磯次郎
委員(故)佐々木 佳 伝		"	金 子 敞 範
" 山 本 仁		"	風 間 英 雄

## 第三次保護審議会委員 (S.50.4 ~ S.52.3)

委員長	金 子 嘉伝次	委員	山 田 猛
副委員長(故)安 達 実		"	平 野 二 八
委員	金 子 敞 範	"	金 子 貞 夫
" 伊 賀 磯次郎		"	風 間 英 雄

## 第四次保護審議会委員 (S.52.4 ~ S.54.3)

委員長	金 子 嘉伝次	委員	金 子 敞 範
副委員長	平 野 二 八	"	風 間 英 雄
委員(故)安 達 実		"	金 子 貞 夫
" 伊 賀 磯次郎		"	山 田 猛

## 第五次保護審議会委員 (S.54.4 ~ S.56.3)

委員長	平 野 二 八	委員	風 間 英 雄
副委員長	金 子 敞 範	"	金 子 貞 夫
委員	伊 賀 磯次郎	"	野 井 義 雄
" 山 田 猛		"	藤 内 久 作

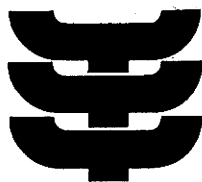
# 赤泊村の文化財

昭和55年 3 月

編集	赤泊村文化財保護審議会
発行	赤 泊 村 教 育 委 員 会
住所	佐 渡 郡 赤 泊 村 大 字 徳 和
印刷	新潟市女池和合町1185 (株) 第 一 印 刷 所







文化財愛護シンボルマーク